

島嶼在筋書

31



壹目番
名末世千代田松
走馬燈姿粉

十五幕
常盤津れん中

- 序まぐ
上野山内花見の場
不忍辨天社内の場
二まぐめ
柳營虎ノ間詰所の場
三まぐめ
牛込五十騎町本多邸の場
築地輕子橋松平邸の場
中島待合茶や小川寄の場
同返し
小日向水道端狼藉の場
四まぐめ
松平邸若徒松藏部屋の場
吉原京町松葉樓見世の場
同與貳階粧太夫部屋の場
五まぐめ
千駄ヶ谷村立場茶やの場
駒場野小鳥御成先の場
同外構御供方留詰所の場
六まぐめ
松平邸外記居間の場
同返し
吉原仲の町港や二階の場
七まぐめ
同松葉や廣間遊興の場
- 池の端白江洗泊住居の場
八まぐめ
松葉や貳階兄弟名乗の場
安西邸門前喧嘩の場
安西邸中間要助忠死の場
安西邸若徒松藏使者の場
九まぐめ
半藏御門外濠端鬨争の場
水道町川上理順居宅の場
同返し
神田明神祭典茶屋の場
白江宅庭前捕物の場
十まぐめ
傳馬町四獄忠士捲門の場
南町奉行白洲詮義の場
松平邸松藏半免歸參の場
同返し
虎之間番士詰所肩揉の場
大詰
松平邸外記書齋夜學の場
同與殿家族分離水盃の場
同返し
西九下下馬先登城道の場
營中虎の間外記刃傷の場

| | | | |
|------------|------|----------|------|
| 松平若徒正木松藏 | 壽三郎 | 外記妹花野 | 吉彌 |
| 徳川將軍内府公全 | | 松平外記 | 我當 |
| 町奉行筒井伊賀守 | | 問部圖書 | |
| 表坊主白江洗泊 | 市藏 | 松平の仲間要助 | 幸藏 |
| 安西伊賀之助 | | 座光寺玄番 | 冠十郎 |
| 松平頼母 | | 戸田山城守 | |
| 石出帶刀 | | 港屋女房お仲 | 大三郎 |
| 本多一角 | 又吉 | 松平頼母奥方二葉 | |
| 表坊主川上理順 | | 座光寺息女八重子 | 壽 |
| 阿部四郎五郎 | | 理順女房お時 | 三ッ之助 |
| 沼間主斗 | | 後松平の下女お時 | |
| 松葉屋の抱粧太夫 | 鬼丸 | | |
| 目安方坂井左近 | | | |
| 神尾五郎三郎 | 璃久三郎 | | |
| 吟味與刀佐久間孫太夫 | | | |
| 若年寄 | | | |
| 井上節 | 仁三郎 | | |
| 松平家來深井俊造 | | | |

明治十六年六月廿日御届

編者 堀亮町二丁目十八番地 定價金九錢
編輯兼出版人 保坂芳三郎
同 梅の屋 由兵衛
發賣元

序まぐ上野山内櫻ヶ岡花見の場本舞臺上野東嶽山中堂
此正面より吉祥閣と書たる額とみ左右櫻の立樹都て上野
の山内の体愛よ花見の心にて米や武兵衛薪屋の長藏兩
人子供を連れ床よりけ居て辨當を開き酒と呑み居る
爰へ出茶やの亭主土瓶と持きて(亭主)今日ハ賑やかで
よろしうムリ升サアお湯が沸々たど土瓶を出す(米や)
何んと長藏さん酒なくバ何んのかのれが櫻うなどハ
まい事といつたものだがあんまりすふ六も見つともね
へ(薪や)何よし腹が出來たから子供を相手よ鬼と
つことを始めよムトみなへ上手へハ入る稽古咄よ成る
向ふより座光寺玄番の(冠十郎)羽織袴大小よて出る跡
より娘八重子(壽)振袖形り此程よりこし元若徒付出て
舞臺へ四人來り(冠十郎)今日ハ日和も麗ゆへ取分賑わ
し此見物人とも見るも又一興おびたしし群集じやな
ア(壽)父上様咲揃ひ升た花盛り能い詠めでムリ升る
(冠)酒横嫌の見物がたわじれも面白事トやなア何ハ

鬼もあれ本山へ參詣致ふ娘來やれト四人上手へハ入る
是と三味せん入の大柏子に成り向ふより安西伊賀之助
の(市藏)問部圖書の(幸藏)沿間主斗何れも羽織袴の形
り大小にて出て來り花道より留り(市藏)西子の粧ひ尤も
淺く揚妃の浴いまだ乾すと芳非妖艶只ならず満山の花
盛り何んと御兩所あてやうでハムらぬか(幸藏)いかさ
まさやうでムる(鬼丸)何れへ參て群集の花の前品と早
見たいて(市)イヤ御同伴仕らふと三人舞臺へ來る(市)
傍へ思入あつて(市)只愛ふる今夜の雨又遇ふ一年の春
と唐土八の口ずさみ花もの云ねへどおもしるさ心く
の詠めトやなア(幸)イヤ何安西氏(鬼丸)伊賀之助と
の(幸)さやうよ花見見惚れずニ參詣いたして(鬼丸)參
るふでハムらぬウ(市)いかさまさやう致そふ然らハ御
兩所ども(幸)同道致すて(幸)(鬼)ムらふわハト大柏子
よて上手へハ入る合方ニ成り吉田屋の番頭の武兵衛の
(又吉)そぼろの形りはる醉横嫌よて出る跡より判人の

源六の(又五郎)羽織股引尻端打の形よて出て(又五)チ
イ〜武兵衛さんさつきからよんで居るのよとふした
ものだそうすまして行ずともい、トやねへか丁度幸ひ
茶見せの敷ものまア此上でいつぶくやつて行ねへなア
(又吉)イヤ誰れかと思つたら判人の源六さんえらねへ
顔するわけじやアねへ何よし仰せも随ひいつぶくや
らかし乍幸ひのなしを仕やう〜ト兩人敷もの、上へ
住ん茶亭出て(亭主)ハイおたばこの火(又五)チイ
〜茶亭差湯と持て来て(亭主)ハイお湯と一ツト出す
(又五)そこへ置てくんねへ(亭主)ハイ〜且那すこし
見せと願ひ升ト手桶を持茶亭下手へ入る(又五)上野
の山で名物の茶を香せぬが一の名代だそふい、が武
兵衛さんかめへ何か銭儲の口が有るなら半口乗りてへ
ものだ(又)丁度幸ひおぬしと相談と仕よア成らねへ
がめへも澤山うまへ事が有と見へるな(又五)そいつ
アあべこべななしだおめへこそ素人堅氣と見せかけ

てとふ〜吉田屋の番頭さんとまで成り上り主人の夫
婦が死んだ跡と引とりこくめいな顔付で娘のおそのを
養女と名とつけ内よ置じやアねへか(又)ろのおろのよ
付ておめへと相談といふの外でもねへがあの吉原へは
めこんで貰らひたひのよ(又五)そいつア耳よりなはな
しだ賢(半藏)松葉屋から上玉が有なら見せてくれレ
コシキの幾でも出とふといふはなし早速はなし込しお
そのさんなら云ふんなしだ(又)スロヤ難有てへ善急
げだ早速にはなしこんでくんねへ(又五)おれが請合
氣遣ひなした(又)そふして小遣ひ銭のよんだ(又五)ろ
れもなしだ(又)アハ、〜(又五)時よ武兵衛さ
んかそのさんよの實の兄貴が有るそふだそそれいよ
した(又)おその、兄貴の剣難の有るといつて此上野の
宿ばふへ入つて剃髪させるところをいふ事か親の手
許をはなれ甲斐くれ行衛がまれの事おそのの時
〜云出て案事ていらアなア(又五)ろイヤとふでも

いふ養ひ親の元ト判なら大威張早速(半藏)松葉屋(又)
そこの何ぶんお頼みだ(又五)それトヤア武兵衛さん一
ト足お先へ参ると仕やう(又)そんなら急度(又五)請合
だよト又五郎向ふ揚幕へ入る(又)これで思た坪とい
ふものだアノ源六なら十又八九のはめ込の得手ものお
ろのと賣つてその金でおれが生涯の楽樂の種坊主の
明株でも買つた日よア〇すこしもはやく内へ歸りか
その味くくろめよア成ねへハテいそがしく成つて
来たわへト是よて此道具廻る
不忍辨天社の場本舞臺正面よ辨財天の本堂と割此
所よ丸もの、大きな石燈籠有り都て不忍辨天社内の
体流行唄よて道具納る爰よ以前(市藏)(鬼丸)(幸藏)の
三人床よ腰をかけ居て(市藏)香の枝履よ随ひ氣の衣襟
よ溢る、と花と賞せし人情の唐も大和も同じこと席よ
芳襟よ臨むもあれバ劔よ小枝を職くあり美人と花と相
對して歸るを忘、今日の遊歩不忍へも参拜せんと御兩

所と共よ廻りしが又水邊の景色ハ格別御貴殿方よも御
意よ叶ひし様子よおさる(幸藏)目移りのする花と花と
りわけて御らん被成れしうまらねど殿中よても噂のた
かひ美人と評判さる、座光寺玄蕃のの娘の八重子物
ごしから風俗まで何所もひとつの云ふんなし殊に承れ
バ琴非音書なら香茶の湯まで誠に工みと申事先刻本山
へ参詣せし時ちらと見かけしが群集の中の遠目ゆへ沼
問うと噂のみ致せしが安西氏より御ぢんじなさか
(市)兼て噂に承りしより縁なくしてはまだ一面識も仕
らつ(鬼)さやうでふるか拙者の度々面會の致せしが見
れバ見る程美しき別品兩親の秘藏大かたならず此頃風
聞に承るに八重子どのに松平外記どのと言号のよ
し(幸)上手を見て(幸)アレ〜御覽被成れ座光寺玄
蕃どのと娘八重子どのとふ〜されて此方へ参る、是
も大かた當辨天へ参詣致さる、と見へる幸ひ伊賀之助
どの知る人に成られたら一所に爰で夕櫻と一見致すも

能き樂しみでハムらぬか(市)それの誠に能き折から重
疊な義でムるト上手より以前の(冠)(壽)こし元若徒出
て來り(壽)父上様あまりおもしろさにつうか(は
やふ辨天さまへ參詣を致し升ふ(冠十)嚙くし母も案じ
からん參詣致そふわい(こし元)サアお嬢さま(若徒)且
那さまお越し被成れませト(市)の三人(冠)傍へ來て
(鬼)玄番どの八重子どの能き折からお目よか、つた
(冠)イヤこれハ(御三名今日の長閑さに東嶽山御參
詣でムるな(幸)仰せ如く彌生の歴かよ花よ浮れて遊山
うた(見受升ればそこ許も息女をつれての花見の
遊山いつもながら八重子どのあてやうさとりわけ今
日ハ粧ふて花の中なる花盛り花の姿ハ一段(鬼)何
ハ玄かれ幸ひの花越るまづ(愛へおより被成ひ(冠)
有難義でムるが最早夕陽西よかたむさ女子と連れたる
事なれば(幸)お手間いせ申さぬ(鬼)サア(是へ
ど是まで(市藏)の三人床よかける(冠)(壽)二人外の

床へかける(市)座光寺氏兼々拙者お障のみに承り居り
しが御息女八重子どののそれなる御寮にてありしよ
な誠によき折からお近きに成り申(冠)是ハ(安西
うじの御わいさつ返入ッて痛み入り升る御意の通り娘
八重子ふつ、う者拙者同様御別懇願願ひ申でムらふ
(壽)私事ハ八重子と申もの父同様お引廻しの程お願ひ
申上(市)イヤ(それハ此方より申事(幸)只今も玄
番どのハ能い御息女をお持被成れたと申居たる所(鬼)
折能く愛でお目よ掛り一座で花見と致すとハ身共も中
々果報有るわ(冠)たらぬ八重子をばさやうよお
賞め下されてハ親子の者が面目のふふるわ(壽)只今
父の申通りふつ、かな私共お席と汚し升るさへ濟ませ
ぬ事なれば只行合の途中ゆへ御めん被成れて下さりま
せ(市)是が途中なればころかやうに打とけらる、もの
、邸宅よてハ叶ぬ座與(幸)八重子どの御遠慮にハ
(鬼)及ばぬわいと是を流行唄も成宗原逸齊の(當燕)町

醫者の持ハ黒の羽織着流し壹本さしよて出る野草庵我
入誹諧師の市蝶羽織若流し壹本さし出て來り(市蝶)こ
れさ(逸齊老さやう急き玉ふべからずサ(當燕)急
きハせぬが足が我えらづひよろ(とするやつと二
人舞臺へ來る二人みな(と見て(當燕)イヨウ是ハ
御前さま方いづれもお揃ひで今日ハお花見のお忍びと
ハ憎ひ(市蝶)下拙ハ御前さま方のお供をしてふら
ハ誹諧いたしたいでけす(市)相替らず逸齊我入の多
辨誠よかや(トト黙して花など池などを詠めたがよい
でない(幸)自分ひとり面白そふに扱々機嫌上戸ヒ
やわい(鬼)我々共斗りでない座光寺氏八重子どのもこ
ざるまいゆハトたしなんだがよくござる(冠)イヤ
(御玄んしやくよ及ぬ事おかまいなく(壽)お遊戯
成ませ(市)落花心あれハ清水心なしイヤナニ旁々能い
詠めでござる(當燕)誠に恐れ入相に問もなければ
お暇てうだい(市蝶)野拙もお暇さやうなればあなたさ

まト二人下手へは入る(冠)矢禮乍一ト足お先(壽)又
お目見へと致升ればけふハ是までお暇を(市)然らば座
光寺玄番どの(壽)安西さま(冠)御兩所さま(壽)御免被
成れて下されませト冠十郎の四人ハ向ふへは入る市藏
ハ壽見とれ居る(幸)安西氏は安西氏(鬼)伊賀之助
どの市藏心付き(市)人相の鐘ハ花や散らん〇誠よ詠め
ハ千金じやなアよろしく幕
二幕目柳宮虎の間詰所の場本舞臺壹面ハ竹ハ虎を畫書
たる金襴都而西御丸虎の間の休初午の太鼓よて幕明く
爰ハ瀬相中の陸尺四人無地の着付袴羽織よて立掛居る
爰へ茶道二人十徳着流表坊主の形重箱へ赤飯を入持て
上手より出來(茶道)只今菊の間へ下つて參る御廊下よ
松平外記殿印升た御重の包みが有升たが慥か御小性組
と存升て持つて參つたト爰へ神樂よふの鳴物よ也上手
より又吉瑞久三郎繼上下紋付御書院番の拵よていて來
り(茶道)是ハ御番詰でムリ升るか(又)チ、猪作老喜丸

どの何ぞ御用でもなるかなト又吉茶道の持たる包も心付(又)ろのお包の誰れどのより上りし予(茶道)御新役の外記殿へ参つたのでござり舛(又)貳品ともさやうかの大包のそれへをさ小色を是へ茶道の又吉の前へ小包と置(又)御用のムらぬ行ッしやれ(陸尺)私共の詰所へ参て扣へ升ふ(茶道)ドレ私も参り升ふト陸尺の下手へは入る茶道の上手へは入る(又)洗泊殿も身共より頼み置たる一條に付少々御面談致度くと御傳へ下されコレ(密)申て下されト茶道は入る(瑠久)其件が洗泊も申越れし海々手前察つし居るが花野が事でもろふかなア(又)仰せ如く洗泊も頼み置しがいか成しか未だよ彼より返事もなく(瑠久)手前友朋のよしみ供々御助力申そふ賄賂を遣ねばなう(洗泊)でい時々の明く事でのござらぬ(又)そ件左程御心下さらば能にお頼み申然し事首尾能相成れば色を増たる山吹の(瑠久)その花嫁の御賞(又)知行に替へてもたんまりと

(瑠久)相成るべくは佐渡の土(又)その山吹の色よきところを一ふく立ち差上升ふ(瑠久)そのお手前が何より賞(又)直さま是まで口切りを(瑠久)賞致とてあるふト神樂太鼓を打込安西の(市)問部の(幸)戸田の(冠)沼間の(鬼)何も繼上下の形まで出来り(市)御兩所より面白そふな嘲しでござるな(又)兎に角なまめさし事でないれバ興を催し升せな(市)新参の外記が見得ぬがいう、致し升た(冠)松平殿々ト(我)の松平外記繼上下紋付まで出る(我)只今うれ(市)コレ外記殿先剋より何としてムつた(我)只今御同役と御一所に支度よ部やへ(市)ヤイ外記どの若年の身まで御書院番の思もよらぬ事だ(我)何卒お怒となだめられ偏よお引廻しを願ひ升る(市)さやうは仰せ有る故ばんと引廻しと致そふ(又)外記どの未お支度前さうし御空腹(我)お詞に隨ひ開き升(市)あれは貴殿御名前の色みごござる(我)どうして爰は先剋宿元より稻魂祭とて贈し品お口よごしよ

召上り下さり升ふ拙者も是にて辨當と開き升ふト蓋をどる是と昔く見て(又)ヤ割子の内は辨當のあらすして(市)乞食も拾ぬ不淨もの「瑠久」外記どの是(五人)何でござるな「我」是いなア「鬼」よも馬糞と申されま(市)誠よ是が狐を馬に乗せたと云ふ「瑠久」馬鹿くしひ義でゐる「五人」ハ、ハ、「我」然し宿元より捧げしろの重箱おのく方直さく御披露願ひ升る「又」おのく是へおす、み被成れ「五人」然らば御免ト重箱の蓋をどり切箸なきもへ「市」箸がなくては是迄も喰つた事がござらぬ「我」殆ど矢念御用捨被下「市」こ、よよい物がムつたト重箱のふたを裂わり箸よなし「市」何れも此箸で賞齎被成ひ「我」拜領ありし標子をば「市」どんだ鹿相を「我」ハ、ハ、此時息込詰よる後ろにて呼老中お下り(市)お扣へ被成ト皆々氣味合にて幕

三幕目牛込十騎町本多一角邸の塙本舞臺三間の間中足の式重正面唐草の襖左右建仁垣此前下草盛り都て一角邸庭先の体大久郎の仲間竹箒と持居る下女小鳥の入りし籠を持居り合方まで幕明く(仲間)ドレもふトそふと仕て晝とまよふかト合方成り興より又吉の一角袴羽織着流して出て来り(又)コリヤ長助大ぶされいも成たのろふと仕舞一寸安藤坂まで参つてくれ(仲間)畏りましたンテ御用(又)弓師へ参り先日直し遣せし弓をどつて参れ(仲間)畏り升たト爰へ若徒出て(若徒)へ、申上る御相番の神尾さまが御出でござり升る(又)是へおとよしもふせト(若徒)畏りましたト若徒仲間下手へは入る合方成り(瑠久)の神尾五郎三郎羽織袴よ出て来り(又)神尾うしよふこそ是へ(瑠久)御めん下されト貳重へ住む(又)今日の御入来何と御用でござるか(瑠久)例の射割催の義も付(又)うれの御苦勞千万(瑠久)今日は参る道すがら美婦の見あさと致してござる(又)さやうでござるか取分外記の妹花野の美婦でござるて手前ごとく執心仕る(瑠久)さや

うでござるか然らば手前御取持仕らふト爰へ奥より出
 て(若徒)御前さまめしました(又)その方部屋の者を召
 連れて(齣)節とよいよふ進物箱としてとへのへ参れ
 (若徒)畏りましたト下手へは入る(又)まづ是で拙者が
 望みも叶ひよふか首尾よくまいればよいが(瑠久)これ
 の拙者が胸よござるて又持べきものよき友じやアな
 アト時斗の音合方よて道具廻る
 築地(若)子橋松平頼母邸の塙本舞臺上手へよせて九尺の
 床の間是より下手の貳重沙綾形の襖左右杉戸都て松平
 頼母邸の体爰よこし元三人硯箱を前へ置歌をよみ居る
 去らばよて幕明く(こし)元みなさんか歌の出来ました
 かいなアト去らばよ成り奥より吉彌の花野島田かずら
 振袖形よて出て来り(吉彌)みなの方爰よいやつたうい
 なア(こし)元お嬢さまよふお出被成たト此時よびおき
 やく(吉彌)どなたかお出よ成るよふすみなのものわら
 ひと一所よ奥へさやと智々奥へは入る合方よ成り小性

白木臺付の(齣)節と持出る跡より瑠久三郎の神尾出る舞
 臺へ来る(瑠久)その方共の次へ参れ(小性)畏りました
 と向ふへは入る大三郎の二葉丸わけかづら紋付の形り
 よて出る(大)神尾さまよふよふこそお出(瑠久)是の御
 内方存外御不沙汰(大)今日わわざのにお出御用でお
 ざり升るか(瑠久)されば少々折入ッて頼母どのよ拜顔
 の得度(大)折悪しく夫トの當番御用わたくしへ(瑠
 久)余の義よござらぬ當家の御息女花野どのをバ同役
 本田一角どのへ御縁邊と願ひ度又此品の一角方よりさ
 しわけくれよと拙者へ依頼御受納下され(大)娘花野の
 言号せし夫トある身此義のお断り申升(瑠久)スリヤそ
 れゆへ此御縁談(大)いうにもト大三郎奥へは入る爰
 へこし元出て(こし)元神尾さま此品と花野より一角さ
 まへ(瑠久)此品を花野どのより届け申す然らばお暇申
 ト去らばよ成り(瑠久)向ふへは入る此時(よび)お歸り
 ト合方にて(我)の外記繼上下形り小性刀を持出る(大)

奥より出る(我)母上のお出迎ひ恐入り升る(大)きのふ
 の助番とやら二日の勤大義であつたみなもの次へ立
 ちやトこし元小性の刀を置て奥へは入る(大)たとへど
 のよふな事あるふども只堪忍の二字を守り升ふがや
 (我)恐入ッたる母上の御教諭(大)そなたも休息しやれ
 ト奥へは入る此時(若)徒松藏若袴形よて出て下
 手よ居て(若)三若殿様是にお出でござり升る(我)松藏
 若替へ手箱たふいかいたした(若)三お部やへ持参
 いたし升た(我)當さやう(若)三若殿様なせあなたさ
 まの御同役にてうろふされてなせこらしておやり被成
 升ぬ(我)それの我胸中にあり且又小人を相手にとつて
 の不足トやわい(若)三恐入ッたる其お詞(我)小人の心
 をどるの利にまかず明日浮世小路の桃川へ安西初め同
 役と打招き馳走をなしての上で引物なりと金子とあ
 たへ勤役中の無事を斗らん(若)三成程はよい御工風
 そよ被成たら此後御城で失禮トバ(我)モシ致なばその

時こそ(若)三それ伺よて蓋ッのあんど(我)ばんと
 部やよて松藏来やれトはやき合方にて此道具廻り
 中橋待合茶や小川亭の塙本舞臺三間の間常足の貳重向
 ふ茶壁龕中茶立口柱へ御待合小川亭と印せし置あんど
 ふ都而小川亭のもやう角兵衛獅子の鳴物にて道具納
 爰に酒肴ととりちらしある又吉の本多鬼丸の沼間居並
 へ居る(又)手前大酩酊いたしたト爰へ以前の瑠久三郎
 中間付向ふより出る直に仲間下手へは入る(瑠久)本
 多氏お待とよでござつたらふな(又)神尾氏御苦勞をか
 け申升たシテ先方のよふす(瑠久)今日頼母の留守
 内方へ申せしが幼年より言号あるもへお断り申と申て
 進物まで突戻され又何んといわる(瑠久)すごい辰
 る其折に花野よりしてこし元の内々此品と貴殿へト瑠
 久三郎懐より以前の文と出す又コリヤ是短冊言号の
 夫トに探と立る我身に思とかけるといませしめ此讀
 歌(瑠久)詠歌とよつてわれをてうろふ(鬼)ろの意

趣返し仕よふがござるてト鬼丸又吉に囁く又スリヤ
安西も拙者同様ト又璃久三郎も囁く(璃久)成程是の御
妙斗らんなら入興の其當日(鬼)道をはかつてくらきと
幸ひ(二人)此返そふを(又)ア、コレひそかよ〜ト三
人傍へこなし角兵衛獅子の鳴物にてよろしく暮
同返し小日向水道端狼藉の塙本舞臺壹面服部坂下夜の
遠見の書割日霞場ヨリ松の釣枝左右植込よて見切水の
音よて幕明くト時のうねみ成り上手より璃久三郎若付
狭み帯尻のまより紺の手拭よて顔と包み出る下手より
鬼丸おなし拵へよて出て二人傍をすかし見て(璃久)ろ
こへござるハ主斗ののでござらぬ(鬼)そふいふ貴
殿ハ五郎三郎どの(璃久)安西氏ハお出のござらぬか
〔鬼〕只今もつてお見へ被成ぬ(璃久)兼て目白の五ツを
相圖よ此處て出逢ふ約束(鬼)手前もさやうござる
(璃久)もはや時剋も来バ兼ての手筈を(鬼)いかよもそ
れがよろしくござるアレ〜向ふへてうちらんどば

させて参るハ儘ハ八重子(璃久)お忍被成ト二人上下へ
忍ぶ鳴物入りの合方よ成る上手より紺着板の中間てう
ちんを持先へ出る麻上下の侍貳人鉦打の乗物へ付そい
陸尺駕をかづき中間大せひ出る都而こんれいのもやふ
みな〜舞臺へ来る此時いせん璃久三郎忍び出てちう
ちんを打落す是よて皆〜逃へ入る上手より鬼丸出
る兩人駕より(璃久)邪摩ハはらつたらつともいやく
引すり出しと駕の戸を明け手と入る駕島田うづら白無
垢の形よて兩人の手をとり出る(壽)何者なれば女と
悔どり夜中の狼藉わらわがさつささ請て見や(璃久)エ
、まやら〜ト兩人さつて懸る(壽)懐剣を抜兩人と
相手よ立廻り向より幸藏の下部要助紺着板壹本さしよ
て出て此中へは入り(壽)幸藏を見て(壽)そちや松平の
下部じやアないか(幸藏)そこも怪我がござりませぬ
かト兩人さつて懸る立廻りト々兩人かなわずよけては
入る(壽)あやうい所へよふ来てたもつたのふ(幸)御打

合せの時剋が延しよ大殿さま御夫婦がさつ御心配よ
て見て参れど下郎へのおつしやり付参つて見ればあな
たの御難義(壽)今更我家へ歸もならつどあつて此儘参
るなら夫ト難義(幸)爰より遠からぬ御親類の諒吉様
のお屋敷へ(壽)そなたのよいよふよ(幸)畏りましたお
のれ安西覺へて居ろト幸藏向ふと見込ハ暮
四幕目松平郎若徒部やの塙本舞臺常足の武重板羽目の
蹴込反古張の壁都て松平郎若徒部屋体稽古唄よて幕明
く壽三郎の若徒松藏上手より出て(壽三)お上の御用も
是で済んだトレ休息と仕様かかれ程不仕合なものがあ
ろふか両親にはやく別れ獨の妹があるといふハ名斗り
どこよどうして居る事やらそれよ付ても且那さまを吉
原へ連れ出す安西等が悪工みこまつた事が出来たナア
ト爰へ幸藏の要助出て(幸)松藏さんすこしはなしがあ
つて来た(壽三)要助ウマアこつちへ(幸)今日ちらりと
はなしを聞ハ且那を吉原の半藏松葉屋で安西がはぢ

をか、せる悪工みからア是が氣よ成てならぬ(壽三)
どふい、工風ハあるめへか(幸)外ハ工風もねへが
れが思ひ付での昔バなしで石井常右衛門で思ひ出した
事が當時座で名の高ハ半藏松葉の粧太夫よ頼み込且那
の御難義と扶ひて貰ふわしが手段(壽三)要助宜どころ
へ氣が付たどふり首尾よくやつてくれる(幸)粧どの
得心してくれ、バ、ハ、カ(壽三)且那様が恥辱と取ね
よふ(幸)あんトるよハ及ばねへト兩人こなし道具獅子
舞の鳴物よて廻る
吉原京町松葉樓見勢先の塙本舞臺壹面ハ大格子の書割
の張物上手九尺の門ト口是ハ松葉樓と染抜し長暖簾を
かけ都て松葉樓見せ先の体すが、さよて道具廻るト爰
よ新造若衆居並び居る(若衆)見せのそふハハ濟んだ一
すいつぶく爰で遣るふトみな〜暖簾口へは入る踊り
地よ成り向ふより以前の幸藏出て(幸)折助風情が粧太
夫よ逢ふといつたら取次もしてくれめへ何だかさつば

り勝手がわからずさまりが悪ひなアト爰へ(十藏)の若衆暖簾口より出て(十)コレ〜奴さん暖簾の内を覗てんで何んぞ用か(幸)爰の内の粧ひといふおいらんよ折入つて無心があつて(十)奴さん折助風情がわいらんよ逢ふどの馬鹿〜(幸)ろふでもあらふが是よ深ひよふすのゐる事とふ情と取次を(十)敷から棒じやわからねへそれとも馴染の客うら使ひよ来たのう(幸)そふいふわけやねへがわいらんよ逢つた上はなしとすらやアわかるうら願ひだどふ逢してくれ(十)おいらんが何んとい、かまらねへが兎も角も取次で遣ふ(幸)早速の承知忝なひ(十)何れ兎もあれおいらんの部屋まで(幸)大きよお世話よ成ましたトさわぎ唄よて道具廻る

松葉樓貳階粧太夫部やの場本舞臺一面の平舞臺上手床の間下手すりよ夜具柳此下たんのすの書割都而粧ひ部屋の体さわぎ唄よて道具納るト爰よ鬼丸の粧太夫襟形よ



て住ひ居る爰へ若衆の(十)も住ひ居る(鬼)仁助とん何んぞ用かへ(十)とこの屋敷の仲間か何んぞせぬろおいらんよ是非〜あつて頼みがあるぞ申升た(鬼)何か仲間さんが頼む兎もあれ逢ましやう爰へ通て下さんせ(十)畏りましたト若衆新造忝みな〜下手へは入る爰へ若衆案内して幸藏の要助出て来る若衆の直も下手へは入る(幸)〜お初よお目よ懸外あなたさまが噂の高ひ粧さまでござりますう(鬼)アイ私が松葉やの粧ひでおござりますとよして頼みと(幸)下郎事の西丸御番を勤られます松平外記と申者の召仕要助と申升る粧さまよ願ひと申すするの私主人外記事忠義一途な侍よて御勤メ被成るその内よ同役たる安西本多なんぞといふねトけた株が藝術と妬く思ひ新役なるを付てんで種〜恥辱と與へたらへ當家へ勝ひ恥をかへせん彼等が工みろれよつて下郎が願ひの貴妓がその夜の相方と成り主人の兼〜なじみの如く取扱ふて下

さるよふ何卒御承知をお願ひ申たし(鬼)何うよふぞいまねと忠義よつたおまへが頼み叶ひて上りよ(幸)流石と張と意氣地で譽れを上げるおいらんその御得心と聞上の主人の恥辱が雪ける道理忝なひ(鬼)私が野合ふからハ素心としてござんせ(幸)有難ふござりまするやうなればお暇と(鬼)もふおかへりでふんぞか(幸)色々お世話よ成りました(鬼)何んの禮よ及び升ふ(幸)さやうなれば粧さまりならづお頼み申(鬼)あんしんして居なさんせと流行唄よて幕

五幕目千駄ヶ谷村出場の場本舞臺壹面の平舞臺竹のまがらみ此前へ薄縁を敷下手よ出茶屋後ろ壹面の野邊見松の立木同じく釣技都て千駄ヶ谷村小休の場所の体在土唄の合方よて幕明くと爰よ百姓三人竹箒を持立て居る(百姓)西丸さまのお成りゆえ道のそうしとしろどのい、付そふじの出来たといふものだと時の太鼓よて向ふより名主兵衛羽織袴形跡より鷹匠春割羽織股引

一本ざしよて鷹を持出る此跡より犬詞半天股引形りも
 て出て〔鷹匠〕そふじばんたん行届しか〔百姓〕鷹一ツな
 きよふろふトを致升た〔鷹匠〕どふか今日得ものが深
 山わつて上様の御機嫌の体をいしとふる〔犬飼〕さ
 やうでゐる〔鷹匠〕兎やこう致す内御休息も相濟御場所
 へ成らせらんも斗られず〔犬飼〕すこしもいやく御小納
 戸衆へ通達致そふ〔鷹匠〕案内致せと時の太鼓よてみな
 く上手へは入る此道具廻る

駒場野御成り先の塙本舞臺常足の草土手正面富士山を
 見せたる枯野の遠見の書割左右も幕を張都て駒場野
 お成先の体〔壽〕紫の割羽織半天股引此傍よ御供頭若年
 寄御小納戸銘々割羽織股引わらしよて扣へ小姓四人同
 し拵へよて扣へ御鷹匠犬飼頭居並ひ居て仁三郎の若年
 寄〔仁三〕ハッ今日の御遊獵快晴の折か、ら君もも、嗚か
 し〔小姓〕御満悦よみなく、入らせられ升よ〔壽三〕臣
 下の諸武士小鳥狩のはたらき過分と思ふぞよ〔仁三郎〕

ハッ御恩の御意供奉の御旗本一統大慶至極に〔昔々〕存
 奉升る〔鷹匠〕アレ、鶴が御場先へ〔壽三〕何鶴が飛去
 りしとどな〔仁三〕然らば是より御場内へ〔壽三〕さ様致さ
 ん〔仁〕それ御乗馬〔みな〕ハてトみなく、上手へは
 入る〔市〕只今の上意と何と聞れた三番組のふたれん
 也へ行ものがないと仰せあつたぞよ〔又吉〕コリや貴殿
 の拍子木が遅きゆへてござる〔冠十〕なせ貴殿の壹番
 よ乗付て拍子木とお打被成れぬ〔我〕それの只今も申如
 く人数があつまりませぬ也へ〔市〕これの貴殿の言わけ
 五人三人不足たりともなせお打被成れぬ〔鬼〕貴殿の常
 うら利口らしく口をお聞被成が勤向の我意でい勤りま
 せぬ〔瑞久〕素讀を鼻よかけ古老の我く、と見さける氣
 質〔我〕お職さまを始め各、方と見さけるなとどの
 〔市〕イヤ、貴殿のさやうでござる何事も御帳書の差
 圖を請るが古例でござる〔我〕御差圖と書ましうや〔市〕
 御問合をもなくお勤被成る也へ兎角仕落か有ると申者

子太鼓にて道具廻

〔我〕度、御差圖を願ひし所御傳授なきゆへ無據二番
 組よ馬術合弟子拍子木役を勤めしゆへ此仁よ承り當日
 いかたたりなく相勤升てムりまする〔市〕スリや二番組
 よか合弟子が〔我〕さやうでござる〔市〕さすれの古老の
 あつてなきが如く〔我〕行届ざる拙者へ何卒御指南願ひ
 まとる〔冠十〕拍子木の指南を致しくれよと申のか〔我〕
 ひたすら御差圖願ひ升る〔市〕その拍子木よこさつせへ
 まづお鳥見が扇の印を上げると番頭がそれと目當に宋を
 かけ升續て輪とかけるを見て拍子木役がかやうに打升
 ト我當肩見を打〔市〕是は鹿相致たもるさつせへ〔我〕コ
 ハ方量も貴殿の振舞〔市〕古老に手向ひか御成り先でお
 ざるぞ〔我〕各、方何卒お職さまへ御執成しと勢子出
 て〔勢子〕御上さま御場所へ被成られ番頭衆のお待兼で
 おざり升る〔市〕何番頭衆が〔我〕その拍子木よ〔市〕何拍
 子木上みより預りの拍子木を入手にわたして相濟升る
 け〔我〕心得ぬ不調法御用捨下され〔市〕たわけづらめ勢

同西九下外塙の塙本舞臺壹面在体の遠見松の立樹同じ
 く釣り枝駒場野外塙の体水の音にて道具廻る〔我〕部や
 住より召出されしを各々が妬く思ひ諸組の中で耻辱
 とあたへ、眞ッ貳ツとの思ひども大切の御成先ゆへ無
 難に濟したる歸宅の上父上に申譯なき肩見の疵ト愛へ
 幸藏の要助出る〔幸〕申あなた若殿様か〔我〕ヲ、要助
 う何用あつて御場内へ〔幸〕あなたの御身の上かあんど
 られて張番の居りませぬと幸ひ繩をく、つて参りまし
 た〔我〕安西らが見咎なり此身の落度行きやれく〔幸〕
 ヘイヤアあなたの顔の疵の〔我〕木の根よ爪づき落馬の
 たし思わぬ怪我と致した〔幸〕それのあふなひ事とぞ
 り升〔我〕ドレ歸宅と致そふかト寺鐘よて幕
 六まぐり吉原仲の町佐原湊やの塙本舞臺三間の間常足
 の貳重下手三尺の落間踏込都て港や見せ先の体とら、
 さの三味線にて幕あくとこ、に仲間若衆仲居居て〔中

問) 今日のおらが旦那の安西さまと始めとして新参の外記さまがお出よ成るから一寸先ぶれよ来たのだ若衆さやうでござり升り一寸此事おかみさんにトみな〜暖簾口へは入る流行唄にて市藏又吉我當璃久三郎仁三郎出て(市)これぞ外記どの見付ね所を始め見るどてろふさよろ〜被成すとも(又)菊の盛りと御詠め被成れひと舞臺へ来る奥より大三郎先に下女付出て(大三)これの安西の御前さまお打揃ひでよふ入らつしやひ升たマア〜こちらへトみな〜貳重へ上り(市)今日同伴致せしうの人より同役ながらも新参のものまだ此吉原の土を踏んだる事のないへん〜つ野暮人(又)そこでわれ〜が今日もういん致してござる(大三)けふ新客のお方さまへ松葉のお職と相方に出せとさつさおつしやり升たが松平の御前さまの粧さんがとふうらおなじみてござんすわいなア(又)コリヤこれの岸が座興で有らふて(大三)おまへ方一寸松葉へ往つて御

前方のお出の事(若衆仲居)ハイ〜畏り升たト向ふへは入る(市)なんと松平うと貴殿にハ此里へハ始めて〜無胸りでござるふト愛へ藝者太鼓持出て来り(みな〜)今日ハありがとふト皆〜貳重へ上る(仁)何とかの〜外記どのを御覽被成い猫にまつた鼠のよふ(璃久)ぶる〜ふるへてござるもへちと直して進んせられ(仁)何さま手前直してト是にて市藏始めみな〜よて我當をなふる事よろしくあつて(市)われ此盆と外記どのへ(我)一老よりのお盆ゆへ項戴仕る(又)身共が酌と熊々酒をこぼす是ハ鹿相仕つたト愛へ若衆出てハイ旦那さま方も御座敷がよろしうござり升る(市)チ、さやうか誠に丁度よい時刻トよろしく流行唄にて廻る

同吉原松葉樓座敷の場本舞臺都て松葉屋貳階座敷の体すが、さよて道具納るト愛よいせんの皆〜ならべ居る新造旦那さま方のお出とバおいらんよト(鬼)ハイ今

そこへ行わいなア唄よて出るモッ港やのおかみさん何かとおせわでありんぞ(大三)何のいらいんれ世話の家業の表でんす(鬼)眞よ外記さん待久しうありんしたなアチ、皆さんお揃でね岸さんよふ外記さんを嬉しうムんす(大三)いつもと違ふて御前さんよ、おつれさんど御一所故爰へね出が通ふ成り升と(鬼)モッ安西のどのさん一ッうけて下さんせ(市)太夫かされた此盃うけいでなんぞ致そふ(又)太夫がお流れとてうだひ致とふム(市)時よ外記どの太夫の深間とあるが其なれそめをお聞せ下被(我)此義ハ平よ(みな〜)コリヤ申されまひ(鬼)モッ皆さん殿御の口から言れ升ふかわたしハ流の勤めゆへなれそめのおはなしを致ませう忘れもせぬ去年の彌生夜櫻を見よムんしてが縁のハし此家へおがりなんして引ケよハづしなから初會惚れ(市)今の粧ひがのろけばなし開け聞程小胸が悪今全盛と名の高さ(粧太夫が外記殿よ(又)思ひ付とハよつはと物ずき(璃

久)粹どか通どかいなる、身で(仁)滯氣地所かいくぢのなよく〜なたとしもの(鬼)どのさんがたよ〜どうあらふとわたしの爲よハ大事の外記さん(大)又お座敷とかへてから思ひ〜よさし向ひト禿出ておいらんお座敷のよふムんすよ(仁)エ、邪摩な所へ禿めが(大)アレモウ野暮な事バつかり(市)思へバ〜(鬼)皆さんゆるしなんしへ(市)ハアあつかましい(我)ア面目もなき事トやなアト此仕組唄よてよろしく幕

七幕目池の端白江洗泊住居の場本舞臺三間の間常足の貳重中茶立口上手に九尺の床の間都て洗泊宅の体稽古唄よて幕明くと愛は植木や花鏡と持居て(植木)庭のそよじか出来た勝手へいつていつふくやらふト下手へは入る市藏の洗泊を提出て(市)イヤうふ〜しひやつたト爰へ女中出て(下女)旦那さまお目覚めでござり升るか(市)茶とたつて参れ(下女)畏り升た只今五助が申升るよハ旦那さまに此お手紙を(市)さやう(下女)

それに御玄關へ斯ふいふ方が参り升たト手紙と名札
と出す(市)これへおとふし申せ(下女)かしこまり升た
ト下女奥へは入る愛へ仁三郎の井上薪出て来り(市)是
の井上さまよふころまつ(仁)イヤ構つしやるな
(市)今日のお出の御用でござるか(仁)されの先日拙者
共へ御番入りの松平外記自身の藝術と自慢にて新参の
身でありながら古老の傳達をばんじ用ひぬ所うら仲間
一統申合せ吉原へ連れ込耻辱あてんと思ひしより返つ
て粧ひが爲まわれ(市)が耻辱と相成り誠に粧ひが松平
の深間やら子細のあるやら貴殿に頼み粧ひが實否を糺
して貰らひたサ(市)いとより安ひお願承知手前も好む
みち(仁)それ承つて拙者もまんずくすこしもはやく
此事(市)安西様へよろしう(仁)貴殿の今の一條をバ
(市)慥な御左右(仁)お待申是といふもアノ外記が
(市)角のまわらぬ所から(仁)人何んでもふだんの
突合(市)浮世の丸く行とぶぶぶなるなト合方よて道具廻

る
松葉樓 粧 兄弟名乗の境本舞臺壹面平舞臺都て粧太夫
部やの体爰は新造禿本を見て居るさのぎ唄みて幕明く
ト爰へ秀出て(禿)モシみなんさ、なんし此間のお人
がおいらんよあいたいとてみなとやよ来て、ござんす
予(新造)部屋にさしわいがありんすゆへ表座敷へとみ
なく(武階)の上り口へはいる我當壽三郎源之助出て
(源之助)サアこちらへお出被成ませ(我)お世話であつ
たコリヤ其方へ次へ参り(壽三)畏りました是へ扣へ居
り升(源)モシ菊の香さん(新造)アイ、お出なん
したかへモシおいらんト(鬼)出ていませこれへ行わいな
アとのさんよふござんしたな(我)是の粧ひ太夫と
の後の久々御無沙汰ト込入つたはなしがあればろの
方へ後方へ迎ひよ参れ(源)おゆるり遊ばしませト源之
助新造は入る(我)ひとせ跡同役よろうのかされ爰へ
来り既取辱を受るとバまつたく其件情よて雪さしめ

へさつとく御禮と思ひしが今日迄の延引此義のゆるし
て下され(鬼)ほんの一時の御座興とつれのお方が意
地わるき(我)無骨もの、拙者ゆへ笑ひの知されども
進上申一品あり松藏是へ参れ、壽三郎出で御用でふり
升か(壽三)兼て汝の妹のある事聞しが是なる思人粧太
夫が汝が姿よ似たと、愚生うつし(壽三)スリヤ傾城
殿よ私が(我)他人のうら似か知らねと瓜と貳つの面体
かつこう(壽三)幼き時よ別れし故顔の慥よ知らねども
見覚のある目尻のはくろコリヤどうでも妹(鬼)ア、モ
シめつたよ傍へよつて下さんすなわしや名乗はせぬぞ
へ(壽三)成程コリヤ尤たそらう父の名の吉田屋喜平様
と言つたであらうな(鬼)どうしてと、さんのお名前と
(壽三)知つて居るのが何より慥な證據其上そなたの名
のふそのと呼んだよ違へあらめへそんならお前が兄さ
んの(壽三)サ、萬吉だ(鬼)年月尋ぬる兄さんでふんし
たか(壽三)妹で在たか(我)別ればとへ一兄弟が巡り逢

ふも不思議な縁(壽三)コレ妹泣な此萬吉劍難の相ある
といつて出家よせんと上野へ頼みなれどもおれの出
家の好まき其内師の坊が都へ旅行の供と成り此地は旅
寮の其内は御家の譜代の正木松藏どのよもらわられて程
なく養父が死去なし直まかれが父の名の今で、松藏と
呼びそれよ付てもそらが身の上浮川竹へ沈みし(鬼)
わたしが四ツのその年父上母さまよ死別れ番頭の武
兵衛が情をかしまわたと引とりはて、苦界へ買れて
來たり十五の年(壽三)スリヤ武兵衛めか(鬼)今で、武
兵衛の私を賣つた其金で表坊主の株買ひ名とあらため
て川上理順といふよし(壽三)そんならそなたの身代でト
二人かなしみ(我)粧ひが身の薄命を聞からの根引を致
たけれど朋友の手前父上の表もある故折を見合せよ
よふよ(壽三)スリヤ妹が身の上と(我)ばんじの身共
が胸あまるわへト爰へ源之助出てモシ御前お迎ひよ参
りました(我)ヲ、みなとやか太義であつた(鬼)どのよ

んお歸りなさんすかへ(我)大夫が根引も何れ其内(鬼)どのさんまつて居るぞへ(我)必らず時せつと待がよいわへトさわざ唄よて廻る

安西伊賀之助門前の塙本舞臺真中鉄金物の乳鉄打たる門構へ小開らき付の門都て安西屋敷の体寺かねよて道具納るト爰又仲間三人居て(仲間)モ、松平折助要助もあつてなら兼てはなしの手紙の一條聞てへものだト爰へ幸藏の要助出て(幸藏)伊之助の中間權平よあつた上どふか味くさつて見てへものだ(仲間)そこへ来るの要助か(幸藏)權平より見りやア三人で何をして居るのだ聞きやア此間權平ハ大そふ手柄と仕たといふじやねへか(仲間)その手柄のそつちに覺へがあるはずだ(幸藏)ム、そんなら三番町で出合つたの手めへあつたう(仲間)ぐすくと面倒だた、んで仕舞へト一寸立廻り爰へ市藏の伊賀之助向ふより出で(市)コリヤさわがし何事だ(仲間)へいこいつが御前さまの事をあつ

こふ致し升たゆへ(幸藏)まつたく持まして(市)コリヤく申たよ相違ない(仲間)いつそふ手込よ(幸)何をト立上るを市藏とんと當て(市)思ふ子細もあれが繩かけはト是よてみなくよて繩かける(市)それ引立ひト時の鐘風の音よて幕

八幕目松平邸支關先の塙本舞臺常足の貳重敷盛付都て松平頼母邸の体調へ張扇の音よて幕明クト爰今若徒軍藏うさへ要助を乗置傍よ扣へ居る爰へ奥より我當出て(我)安西氏より御進物とあつて御使者太義軍藏イサ御受納下されト爰へ幸藏を出す我當見てハテ心得ぬ安西よりの贈り物ト一寸思入儘よ受納申たとお傳へ下され(軍)畏つてムり升るト下手へかごかきとつれば入る(幸)御前さまにお目よ懸るも面目次第もござり升せぬ(我)是に何か子細あらんはやふ申せ(幸)安西さまの御門前よてさななき下郎のよりあいで詞わらうひが元と成り喧嘩口論致升たが安西さまのお耳に入る

かやうなさまに成ましたとよそ御免被成て下されませ(我)かへすくも惜つくさまつ安西氏への申わけ難うゐるはやまいれト若徒出る要助と庭へ引ケト寺がねよて道具廻る

松平邸庭先要助忠死の塙本舞臺常足の貳重正面襖左右せうじ上下下草石燈籠都て庭先の体風の音にて道具納るト爰又幸藏ははれ居てツ、幾ら悔ても仕方がねへ此上ハ御前さまの御手打を待より外ハねへト爰へ我當出て一老たる安西氏の門前ともは、からう喧嘩口論致せしめへ熊と手重くのりものにて予が之關までかき入れさせし心なくてハ叶まじかゝる耻辱を引おこしたる汝子か手討よ致すかねんいたせト立上る爰へ吉彌の花野出てお兄さまお待下されませ(我)罪あるゆへ手討よ致すをなせうちや留る扣へおれトさかる壽三郎出て其レ御前さま何へ要助を御手討よ被成れ升るコレ要助何うよふすいまらねへが一通り此松藏へ聞してくれ

(幸)松藏さん面目もない此身のふしたら安西さまの仲間と言葉あらそいが伊賀之助さまのお耳に成り果ハ此身を賣せつらん又其上あきたらず御前さまへ面當に立關先までかつき込まれ其落度よてお手討よかりやア有難ふ思ふて居升(我)伊賀之助が疵工みと忽ちすいりやうなしたり又要助手疵なか、存命なり難をぢう一命貰ふぞよ覺悟のよいか(幸)南無阿彌陀佛ト床の三重よて廻る

安西邸上使の塙本舞臺正面紗綾形の襖上下杉戸都て上使受の体中の舞よて道具納るト爰又取次居てイッ此由を御前さまへト後よて市藏聞た、ト出る(壽)是ハ安西の御前さま御機嫌よろしく手前事の松平外記が家來秘藏と申者(市)くるしくなひ近う、使者の口上の(壽)主人外記申升ハ御心よ懸られ何よりの贈り物有難く拜領仕り御禮の爲此一品御受納下され升ふ(市)返禮受る覺りムらぬとく、持歸られ主人よ

斯くと申傳へ下され(壽)御一覽もなく返さる、いひなる事(市)とく、持歸られ(壽)御受納なくて使立し此松藏主人へ申わけなし(市)返とくも不禮千万ト足よて三室と踏踏す中より要助の首出る市藏思入伊賀之助儘は溜手致たり(壽)スリヤ御受納あると、是よて手前が役義も濟主人外記も嘸満足(市)ならぬ此首級軀と鬮髭と別く、(壽)放くの主徒三世(市)御使者太義と合方よて幕

九幕目田安御門外闘争の場本舞臺上手田安御門下手辻番の休爰も親や二人居る(辻親)へい親く、爰へ壽の八重子跡より若徒先へ仲間九曜の星の紋付たるちようちんと持出るずつと跡より壽三郎の松藏出て(壽三)それへお出被成る松平のお嬢さまでいりませぬか(壽)ナ、松藏か(壽三)ぢやうでいりませぬ今日どちらへお出でござり升る(壽)座光寺へ参りし辰やわいのふ(壽三)ぢやうでござりませぬか御門前までお送り

申せしふ(壽)イエ、勘當うけしそなた故父上の手前もわり成ませぬわいのふ(壽三)成程わたくし其御勘當の詫を願ひ度(壽)何れ其内折と見合せ(壽三)何卒お願ひ申升る又其内違いましふ、壽三郎下手へは入る親や出て壽のかんざしを扱て下手へ入るてうちんを置て仲間若徒追かけはいる爰へ又吉の理順堀の上より出る上手より市藏の安西出る辻番より鬼丸の沼間出る三人よて闘争の立廻るよろしくある(影よて)吹上御寶藏へ盜賊が入りしと番士御出合被成ひ(壽)儘もあれ(市)わやしき人がけ(鬼)跡追うけト、やさ合方よ下道具廻る

飯田町九段坂の場本舞臺面日窓付屋敷長家の体とんくよて道具納る爰へ捕手六人出ておのく方よぬからぬよふおまのひ被成ひト忍ぶ(壽三)出るてうちんよ爪つきコリや御屋敷の御紋の付た提ちん〇、こふして居られぬわへ爰へ捕手六人ばらくと出て御

用だど打て掛る取物の立廻りせん、よて道具廻る水道町川上宅の場本舞臺常足の貳重堂間附家体上手床の間下手よ玄關都て川上理順宅体流行傾よて幕明くと爰よ下男こはいろと遣つて居る傍よ源之助の下女モヤ大助せんふまへの音色も聞あさい、うげんよ仕なさんせ(下男)本姓ならみやとよするか(源之助)こふするわいなア(下男)喧嘩々ト爰へ三ツ之助のお時出てそふくしひい、かげんよ仕なさんせ(下男)恐れ入升たト源之助下男下手へは入る(三ツ之助)いつや洗泊さまにうりた金それ付ても理順どの、そふり何よやら隠した様子コリヤモシヤ吹上の盜賊ハ夫トの理順どのでいあるまいかト市藏頃よて出て頼母ふ、(三ツ之助)ハイ、どなたさまでいり升りマ、あなたハ洗泊さまこちらへお通り被成ませト貳重へ上る(市)イヤ、つともお時どの、わてやか(三)御笑談はつかり何のなぐても一ト口上つて下りませ、酒肴と出す(市)こ

れハお構へ下さるなシテ今日ハ理順どのの留守かな(三)他行いたしました(市)今日ハ是非とも御返濟と願わねばならぬ(三)中、二百兩の金子も、當時のくらしでの御返濟がサア、おわがり被成升せ(市)イヤ、これの時どの、お酌で、又香升て(三)御笑談はつかり私も(市)洗泊様の獨身でお時どの夫婦中のよいが蒲山しひて(三)御新造さまいんごふ被成升た(市)西方極樂へ引越升た(三)さつぱりせんトませなんだが跡が定めしつかへており升ふ(市)中、跡がつかへる所か女房よ成りてのなひのでこまります(三)私が五六年も若ど理順捨てあなたのお所へふり込み参りよとござりますばアさんトヤア仕方がありませんね(市)どふしてばアさん所か油の乗つた陰さがり(三)うふおつしやるの、あなた手り嘘も嬉しうござんす(市)うしどみし世でおめへが柳橋で飛鳥落す盛りの時分理順と張合つたがどふ、理順よ張落され(三)私しやつまらな事とし

たのさ(市)顔よまわがよつていどまりがまれてあ、捨
てられないよふトんをさる氣サ(市)捨りやアおれがひ
るふのサ(三)嬉しひねへト市藏横よ成る(三)風と引と
わるひうら二階へいつてお休みなまひ(市)寐てもい、
のか(三)よくなくつておふするものかね(市)コリヤ
どふやら夢のよふたト唄よて兩人上手へは入愛へ又吉
出て町内でさらぬい亭主斗りなりとハ門ト口へ来て此
履物ハ洗泊のだなコリヤ三百兩の金をふんでやりてへ
ものだ太助おさんくト三ツ之助帯よて出て且那お
歸りてござり升るか(又吉)誰れかおれが留守よ来たか
(三)ハイ今洗泊さまが来て貳階よ寐て居ります(又吉)
手めへいどこよ寐て居た(三)アイわたしや貳階の眩り
けで突つふして居て居升た(又)突つふして寐るのよそ
の形りいなんだ細帯じやアねへか(三)今鹿相としてお
酒をかけたから貳階の手摺へ干て置たのさ(又)コリヤ
思案ものだわへト愛へ市藏出てイヤ今御師宅かな(又)

洗泊どの今日の板橋から廻つてござつたり(市)買色い
さつぱりどたちもの(又)それじやアげいしやマ地獄か
(市)女猫さへひさの上へよりつうねへ(又)跡はらのや
めねへ人の女房と問おるのが徳用サ(市)エ、ドリヤお
暇致さふ(又)ゆつくりとしてみい、トやアねへ(市)
おつくりとい、じやアれいの金あんまりおつくりすぎ
るけふいさいそくがてら参つたのさ(又)けふ迄の御約
速皆濟仕升ふ手箱よりお時の証文出して三百兩の金ハ
則ち是だ(市)此証文ハ何んだ(又)そりやお時の年季と
抜た親元の証文當人ぐるみ引とつておれが入れた借用
証文こつちへ歸へして貰てへ(市)何んど(又)何よも言
ねへ譯いそつちにあるだらふ(市)成程証文返さふ(三)
是くら私も乗かへて(市)花嫁のねりこみど仕よふト流
行唄よて幕ツナキ

九幕目神田川身投船中の場本舞臺壹面のお茶の水の遠
見都て神田川の体水の音家体バやしの鳴物よて幕明く

ト愛も船頭大三郎の二葉壽の八重子百瀬の花の下女若
徒家根舟の内よ居てト此時水音する後よて大せひ身な
げだ(舟頭)何身投だ(大)助て遣りやいのふ(舟頭)
是へ流れて参り升たら助てやりませふ(若徒)それろこ
へ流れて来た(舟頭)どつこいな(若徒)奥さま助り
ましたと(三)生きておられませぬゆへ御見のがし被成
ませ(大)見受ますれば盛りのお年ハひ命を捨るのよぎ
ないわけてふりましふ(三)御すいりやうのどふりてふ
ります(大)どうぞわけをいまして聞かして下され三ツ
之助此事斗りの御免被成れて下さりませ(大)成程船の
中ゆへ御遠慮御尤丁度又支度前でふりますから近所の
茶見世まで同道被成ませ(三)有難ふふります(若徒)
舟頭守山へね出遊バすから守山へ付てくれ(舟頭)かし
こまりましたおあふのふりました(大)静よお上りと
氷の音家体離子よて道具廻る

お茶の水守山貳階の場本舞臺壹面の平舞臺貳階上り口



と見せ都て守山座敷の体合方よて道具納ると愛よ以前
 の人数居ならび居て(大)サア爰へ參れば遠慮のムリま
 せぬいなし被成ませ(壽)母さまもおつしやるも私共
 よ御まんしやくなくおいなし被成ませ(三)何をお隠し
 申升ふ元私ハ柳ハしの藝者で小時申者三年後又御城
 へ勤る御坊主の川上理順と申人よ身受されしが日増
 理順が身持あしくついに私と退出し仲間の洗泊さまが
 不便とおつしやり私を引とり其後洗泊どのも女郎と受
 出し又私も退出されるれもへ身を投たのでムリます
 (大)おまへさんの親御か兄弟衆のないのでござります
 のう(三)三ツの年よ母よ別れ引つ、き身代も手廻り兼
 壹年立つか立ぬ内又もや父に死別れ伯父の世話よなつ
 て居りまし兄も一人ござりましたが是も行衛がしれま
 せぬ儲名の要助と申ました時サも聞ませられ築地の屋
 敷勤めて居ると申事(大)マアその従弟の年ハいくつ位
 でござります(三)三十位でたくし顔付小供のう

ちから義のつよい産れでござり升る(大)そんならアノ
 要助ハ(壽)こなたの従弟で(大)おまへの生國ハ上總の
 東金とやらでござりました(三)あなたよ御まんじで
 ござり升るな(大)同じ名前國所年かこうから顔形チ
 氣質まで似たものがわたしの屋敷に居り升女の従弟が
 あるといつて是もすがたがよふ(三)さよふならあな
 たのお屋敷よ(大)鬼も角もわたしの屋敷へ(三)何から
 何まで御恩の程聖天の鳴物よて幕返し
 白江洗泊庭先捕者の場本舞臺元の洗泊の住居の体明鳥
 笛端うたよて幕明く爰よ市藏鬼丸居て(市)おその何を
 して居るのだ(鬼)今時鳥と聞て居ります(市)マア
 こつちへ来るがい、(鬼)わたしやおまへの儘よなら
 ぬチ(市)身受とすればおれがもの(鬼)おまへの心
 そでないゆへ(市)ソリヤ又とふして(鬼)お時さんハ
 かしからのお馴染川上さんとやらは根引されその後お
 まへがそのかしむたひ内へ連れ込で半時の樂もさ

せず又わたしと請出してお時さんと退出しわたしもお
 まへの氣よ入らぬ時ハ退出されるんな水くさひお人ハ
 いやでござんす(市)金輪ならくそなたも惚れたもへお
 時よそなたを身うへる身共(鬼)人の恨みが恐ろしひわ
 いなア(市)外といふ字が迷の種(鬼)いやとやわいなア
 ト鬼丸袖よて天窓よぶつてツンと奥へは入る(市)此上
 ハ可愛サあまつて憎むのたどへト立上る捕手四人十手
 と持内へは入り捕手白江洗泊御用成るがト是よて鳴物
 に成り捕物の立廻りト捕手四人洗泊とつたととん
 くよて幕

竊一件(鬼)御貴殿ハ御助役義御苦勞にぞんじ申松藏
 事も度く拷問なせと身よ覺へなひと申のみ(瑞久)な
 うく一筋なつての參らぬゆへ(鬼)それ松藏を引出せ
 (横目)畏つて入り升るト兩人門の内へは入る松藏の
 なつて二人取上るりてよ出て來り(横目)仰せよ隨引
 すへ升て入り升る(瑞久)コ、ヤ松藏先達より度くの
 拷問致せども存せぬと斗り今日ハ嚴敷拷問致し是非共
 白狀致せるチ(鬼)其苦痛を致さんより覺へある事なら
 まつすくに申て仕まへ(壽三)有難ひの御詞獄屋の内
 よも長くの日數上お手敷をかけ升るがぞんせぬと申
 より外のおざり升せぬ(瑞久)今日ハ是非とも白狀致さ
 せぬハ相成らぬ(鬼)然らば勝手よ召れ(瑞久)コリヤ松
 藏九段坂よてお召捕のせついかのわけで手向ひ致し
 た(壽三)盗み升せぬゆへお手向ひいたし升た(瑞久)た
 どへ何よ申そふとも其場よ落たる手丸の提灯(壽三)
 盜賊よ這入り升るよ提灯を灯しは入り升ふや且又將軍

十幕目傳馬町囚獄拷問之場本舞臺真中白木造り屈附本
 様高足の貳重上手に壹間の大戸口下手板羽目都て囚獄
 の休時の太鼓よて幕明くト爰に横目附四人居ておの
 く最早御出席よござり升ふト鬼丸の與力瑞久三郎
 の與力繼上下よて大小よて出る(瑞久)是ハくお役目
 (鬼)御苦勞よぞんじ升る(瑞久)松平頼母元家來正木松

盗賊よ這入り升るよ提灯を灯しは入り升ふや且又將軍

家の御差料金拵への御太刀何よし盗み升ふや(璃久)われが仕業に相違ない(壽三)スリヤとて迄も御疑ひが(璃久)打すへる用意いたせ四人心得升た(璃久)それもじり懸イト是よて四人壽三郎をさんくよ打(壽三)たどへいかよ御拷問にい升てもぞんせぬ事いせんせませぬ(璃久)いつそ身共が手をあろじト此時向ふにて又吉まばらくくお扣へ被成ひ向ふより又吉繼上下大小よて出て来り(璃久)石出帯刀どのそれがしガ詮義を何故よ御止め被成か(又吉)御止め申の拙者にあらせ御支配伊賀守どのより御下知でござる(璃久)なんと(又吉)松藏詮義の義伊賀守どの、思召あれバ御沙汰あるまで入牢致し置との仰せ渡され(璃久)何御奉行差圖よて(又吉)いかよ(璃久)テモ拙者の懸りゆへ(鬼)ア、イヤ佐久間氏 私ならぬ奉行の御差圖お扣へ被成れひ(璃久)とふとも勝手よ召れ(鬼)私し事勝手よ致さぬ(壽三)スリヤ私の御詮義(鬼)今日ハ是

迄(壽三)有難ふござり升る(又吉)手當をいたし遣わせ(璃久)馬鹿くしひ何の事だ四人立升せよト三重時の鐘よて此道具廻る
南町奉行所白洲の場本舞臺四間通一の家休都て町奉行所の体時の太鼓よて幕明トト愛に壽三郎三ツ之助市藏又吉目附役のこらず居並へ(壽三)松藏一件のこらずまかり出しよなみなくハッ(壽三)川上理順其方義御抱席と申午御寶藏へ忍び入り御差添と盗みその上以前武兵衛と申せし時との申者を吉原町へ賣渡し候段不屈のいたり死罪申付もの也(又吉)ハハ(壽三)白江洗泊御講代席の身勢を辨へず高利の金子と貸付しだん不屈の至り遠島申付るなり(市)ハハ(壽三)松平頼母召仕下女とさ其方義理順妻のせつ夫トの悪事を見届ケ離別後訴へ出し段神妙の至り其儘主人へ相渡す(三ツ)有難ふぞんじ升る(壽三)松藏其方先達而不審の筋あつて吟味中揚屋入り申付所とさガ松へよより詮義の上無罪たる

事分明なり出牢の上深江俊造へ引出す俊造有難ふムり升る(目安)双方立升せよト時の太鼓よて幕大計松平邸奥座敷の元の道具に成るあらよて幕明くト呼びお歸り(壽)出て来り向ふより(我)出て来り(壽)只今お歸り遊ばし升た(我)佛參の歸り御本家へ立より遠江守どの等お目懸り永くのおはなし致して参つた(壽)それよろしうござり升たトこし元出て申上り升る只今座光寺さまが御入來でござり升る(壽)何父上か(我)甥御どの是へ申通しませ(壽)かしてまじり升たト爰へ(冠)の玄蕃出て来り(我)甥御様まじり(是へ(冠)ゆるつしやれ見れ(我)銀の上下と着し何れへ出かけると見ゆるな用事があらばおかしやれ(我)今日佛參の歸り本家へ廻り只今歸宅いたし升と(冠)コリヤ八重子承れば懐胎のよし大切よいたせ銀どのも嘆悦ばしからふ(我)御心添へ有難ふとござり升る(冠)當時の世の中で私の宿よて同役害し君へ不忠親へ不孝イヤウならづ

耳よかけられなこれのはなしでござるアハハ(我)甥御の仰せの通り義についで命と捨忠義の爲よ親と討が武士の習ひ(冠)それとて末世の鏡も成る事なら余の長ばなし歸宅致さぬ(壽)父上さまお歸りでござり升るか(冠)又其内參上致さぬ(我)さやうござらば甥御さま(冠)かならず勤仕よだんなく(壽)父上様も御機嫌よく(冠)身重の愷大切と致せ(我)是が此世の(冠)エ(我)イエ此よふな悦びハムり升せぬ此仕組よろしく道具廻る
同廣間水盃の場本舞臺四間通し中足の貳重正面襖床の送りにて道具納る爰に(我)書齋仕て居る父上初八重子花野母上さまよいとまよつげ明朝登城ガ此世の名残ト爰へ(壽)出て先刻より御氣分わしとの仰せゆへ御合藥持て参り升ためしあがりませ(我)誰ガ云付よて薬りと持つて参つた(壽)御本家であつしとあすこし遊ばし御氣分がわるいと御意遊ばし升たゆへ(我)コリ

ヤ無理よ病人よ致すのじやなア(壽)とふいたし升て
 「我」夫トが壯健を悦ぶべきか妻たるもの、常成るよ藥
 りともつて参るとハ夫トを調状致して憎つくひやつさ
 やうなもの今日より離別いたと座光寺方へ歸らつし
 やれ(壽)藥と上げ升たが不調法よて是といふ落度もな
 く是より何か譯がムリ升ふわけと明かして下さりませ
 (我)離別いたと外ならつ松藏の妹ののに得より執心
 今宵くらそのと聞の樂致すよろちがわつてハ邪摩ゆ
 へ離別致とのだ(壽)何とふつしやり升ても此夜ハ歸へ
 り升せぬ(我)鬼や角申さつ出て參れ(壽)スリヤとふあ
 つても(我)叶ハぬ事だト市藏の頼母出て不所存もの、
 外記親が手づから討て捨る覺期なせト市藏我當よ切て
 掛る兩人甲乙の立廻りあり市藏驚き連れ成るうち手
 練それよてハ怨敵安西神尾らと仕留ハ大丈夫(我)ス
 リヤ兼ての存念を去らいてならうか今年で丁度五年跡
 駒場野の御成のせつよくもがまんといたした是成る短

刀とそちよ得させる間通れ手柄と致せと爰へ大三郎
 出て様子なき、升た日頃ハ似合ぬ嫁女へあいにそづか
 し思ひ詰たる武士のいつてつかならず 比與よ名をと
 るまい予(我)父の御教訓忘れハ致ませぬ(市)凡生ある
 もの親ハ子をいつくしみ子の親を敬ひ誰れしもおしむ
 一命を(大)捨よと教へる親の身ハ(壽)千年の壽と保つ
 より(吉彌)死覺悟の兄上さま(市)此の上ハ親子の名残
 り目出度祝して申付たる用意の 盃持參致せ鬼丸三ッ
 の者三寶土器持出來り(鬼)奥櫛花野さま何といたした
 ものてござり升ふ(三ッ)之助(お心の内ハ思ひやられ升
 る(市)目出度祝ふて一献さ、んと宜しく願盃とる(我)
 目出度御納下さり升しふ(市)納盃至らふコリヤそのよ
 ハ眼中よとみ面色替り扱ハ自殺いたしたなア(鬼)
 御すいりやうの上からは御らやして下被升せ當々
 ヤ、何ゆへの自殺なる予(鬼)わたくしが吉原よ勤せし
 其折よ御同役兼と御同道よてお出の時心の迷ひくら

あなたを見ろめしゆへお傍道ひをのしみよけふまで
 くらし居り升るが一部始終を承たつて覺悟を極め門出
 を祝してめいどの 魁(我)進ハれ出かした 忝ない(大
 三)倅が嫁とも思ふておれバ迷わづ成佛いたせ(三ッ)
 私もどくより覺悟を極ハ髪そりを出して髪と剃る(大
 三)そのと、時迄が此体(市)此上ハ門出を祝して舞
 ふて立ちやれと誦よ成りよろしく寐
 返し西丸下下馬先登城道の塙本舞臺壹面よ貳重櫓見付
 の門貳重橋堀端之休時の太鼓鶴笛よて幕明くト爰よ壽
 三郎我當(壽三)今朝ハ御登城の刻限ハ余程お早ふおム
 り升た(我)今日ハおもふむねもあれは登城早く致した
 (壽三)外の供ハお歸去遊ハして私ハ一人お留り置御立
 關まで私登人でもよろしくごムり升か(我)一人で苦しラ
 なひまかし其方ハ頼みがあるが聞届ケくれまいか(壽
 三)おふふりと取れとの仰せでおざり升ふがいさい承
 知致升た(我)さやういたしてくりやれ(壽三)承知致す

した大恩を受ました御主人さまいつの世よかはうする
 時節がござり升か(我)その時節至來して怨敵安西を始
 めとして其外肝惡共を討て其座をさらす 割腹なさん
 (壽三)スリヤ御前さまハ殿中よおいて御相番と(我)
 諸組の爲よ捨る一命ト時の太鼓よてよろしく道具廻る
 虎の間外記傷刃の塙都で營中虎の間体爰よ市藏居る外
 記殿か先刻より番代り相待申した(我)これハ、お職
 まい何り御用でござるか(市)殊の外肩が張つてならぬ
 もみほおして下さらぬう(我)それハお安ひと失禮なご
 ら御紋服もへ御召替と(市)成程これハ御尤ト着替る是
 より我當もみよ懸る是ハ又吉鬼丸冠十郎璃久三郎みな
 して我當の着付の紋を墨よてぬる(又吉)外記どの
 紋ハ九曜でござるが三ッへらして梅鉢よ致したよ
 紋でござらぬう(鬼)成程コリやよ紋でござる(我)
 おの、方よもあまりなる御座與(冠十)そのあまりと
 へらして三ッ星がよふござるトみな、よて又ぬる此

時(我)の差添をみなくよてふむ我當是の拙者が差添
 とが蹴又被成ると(市)かやうなどふり道置るゆ
 へ(鬼)コリヤ大方なまくらでござり升ふト是よて我
 當むつとして(鬼)コリヤ赤子の腕も切升まひ(我)其腕
 よりも外にのそみがおざる(鬼)シテ望みの品ど(我)
 外でもおざらぬおのく方の生き首が望みでおざるみ
 なく(我)七年此方の罵り嘲罵もはや了簡成ら
 ぬと是よてよろしく立廻りあつてみなく切るよろ
 しく道具廻る

同虎の間道具の續は成り爰よて我當切服とする是へ
 壽三郎の阿部出て(壽三)シテ刃傷及びし人々の(松
 五郎の池田)安西伊賀之助本多一學始めその外相番中
 十人よござりまするみな存命よてかすり疵よござりま
 する(壽三)シテ疵所(松五郎)向疵よござりまする
 (壽三)シテ外記(存命)成るる絶命(相糺)さん何ん
 らの趣意で刃傷及びし(我)切め置し此遺書イサ御

披見を(壽三)披見の上若年寄兼へ進達申さん流石の弓
 取直なる御代の舞鶴城(松五)竹の千代まで譽れをのこ
 して(壽三)の松平の御稱号手の内蔵心致す此仕組
 よろしく幕

中島座筋書

特54

21

074867-001-5

特54-21

中島座筋書

保坂 由兵衛 / 刊

M16-20

CEK-0258

